

こころ

夏目漱石

上 先生と私

一

わたくし

私はその人を常に先生と

呼んでいた。だからここで

もただ先生と書くだけで本
名は打ち明けない。これは
世間を憚^{はば}かる遠慮というよ
りも、その方が私にとって
自然だからである。私はそ
の人の記憶を呼び起すこと

に、すぐ「先生」といった
くなる。筆を執^とっても心持
は同じ事である。よそよそ
しい頭^{かしら}文字などはとても使
う気にならない。

私が先生と知り合いにな

つたのは鎌倉である。その
時私はまだ若々しい書生で
あった。暑中休暇を利用し
て海水浴に行った友達から
ぜひ来いという端書を受け
取ったので、私は多少の金

を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費さんちやした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たたないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から

帰れという電報を受け取った。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧^{すす}まない結婚を

強^しいられていた。彼は現代
の習慣からいうと結婚する
にはあまり年が若過ぎた。

それに肝心^{かんじん}の当人が気に入
らなかった。それで夏休み
に当然帰るべきところを、

わざと避けて東京の近くで
遊んでいたのである。彼は
電報を私に見せてどうしよ
うと相談をした。私にはど
うしていいか分らなかった。
けれども実際彼の母が病氣

であるとするれば彼は固^{もと}より
帰るべきはずであつた。そ
れで彼はとうとう帰る事
になつた。せつかく来た私は
一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分^{だいぶん}

日数^{ひかず}があるので鎌倉におつてもよし、
帰つてもよいという境遇にいた私は、
当分元の宿に留^とまる覚悟をした。友達は
中国のある資産家の息子^{むすこ}で金に不自由
のない男であつたけれども、学校が
学校なのと年^{とし}が年なので、生活の程度

は私とそう変りもしなかった。したが
って一人^{ひとり}ぼっちになった私は別に^{かつこう}恰好
な宿を探す面倒ももたなかったのであ
る。

宿は鎌倉でも辺鄙^{へんぴ}な方角にあった。
玉突^{たまつ}きだのアイスクリームだのという

ハイカラなものには長いな暇あひだを一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占

めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻^{くす}ぶり返った藁^{わら}葺^{おき}の間^{あいだ}を通り抜けて磯^{いそ}へ下りると、この辺^{へん}にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。

ある時は海の中が銭湯せんとうのように黒い頭
でごちやごちやしている事もあつた。

その中に知った人を一人ももたない私
も、こういう賑にぎやかな景色の中に裹つつま
れて、砂の上に寝ねそべってみたり、
膝頭ひざがしらを波に打たしてそこいらを跳ね廻まわ

るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓ざつとうの間あいだに見付

け出したのである。その時海岸には

掛茶屋かけちやが二軒あつた。私はふとした

機会はすみからその一軒の方に行き慣なれてい

た。長谷辺はせへんに大きな別荘を構えている

人と違って、各自めいめいに専有きがえの着換場ばを拵こしらえていないここの避暑客ひやうかくには、ぜひともこうした共同着換所きゆうちうかくじょといった風ふうなものが必要なのであった。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外ほかに、ここで海水着を洗濯させたり、ここで

鹹^{しお}はゆい身体^{からだ}を清めたり、ここへ帽子
や傘^{かさ}を預けたりするのである。海水着
を持たない私にも持物を盗まれる恐れ
はあったので、私は海へはいるたびに
その茶屋へ一切^{いっさい}を脱^ぬぎ棄^すてる事にして
いた。

二

私がその掛茶屋で先生を見た時は、
先生がちやうど着物を脱いでこれから
海へ入ろうとするところであつた。私
はその時反対に濡れた身体を風に吹か
して水から上がつて来た。二人の間に

は目を遮る^{かざす}幾多の黒い頭が動いていた。

特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかった。それ

ほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が

放漫^{ほうまん}であつたにもかかわらず、私がす

ぐ先生を見付け出したのは、先生が一

人の西洋人を伴^っれていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否^{いな}や、すぐ私の注意を惹^ひいた。純粹の日本の浴衣^{ゆかた}を着ていた彼は、それを床几^{しょうぎ}の上にすぼりと放^{ほう}り出したまま、腕組みをして海の方を向

いて立っていた。彼は我々の穿く猿股
一つの外何物も肌に着けていなかった。
私にはそれが第一不思議だった。私は
その二日前に由井が浜まで行って、砂
の上にしゃがみながら、長い間西洋人
の海へ入る様子を眺めていた。私の尻

をおろした所は少し小高い丘の上で、
そのすぐ傍わきがホテルの裏口になつてい
たので、私の凝じつとしてゐる間あいだに、大分
多くの男が塩を浴びに出て来たが、い
ずれも胴と腕と股ももは出していなかった。
女は殊更肉ことさらを隠しがちであつた。大抵

は頭に護謄製の頭巾を被^{かぶ}つて、海老茶^{えびちや}や紺^{こん}や藍^{あい}の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼^めには、猿股一つで済^めまして皆^{みんな}なの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧みて、そこ
にこんなでいる日本人に、一言二言何
かいった。その日本人は砂の上に落ち
た手拭を拾い上げているところであつ
たが、それを取り上げるや否や、すぐ
頭を包んで、海の方へ歩き出した。そ

の人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜
辺を下りて行く二人の後姿うしろすがたを見守つて
いた。すると彼らは真直まっすぐに波の中に足
を踏み込んだ。そうして遠浅とおあさの磯いそ近く
にわいわい騒いでいる多人数たにんずの間あいだを通

り抜けて、比較的広々した所へ来ると、
二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。

それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて

着物を着て、さつさとどこへか行つて
しまった。

彼らの出て行つた後、私はやはり元の
床几しょうぎに腰をおろして烟草タバコを吹かして
いた。その時私はぽかんとしながら先
生の事を考えた。どうもどこかで見た

事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人が想い出せずにしまった。

その時の私は屈托がないというよりむしろ無聊に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見計ら

って、わざわざ掛茶屋かけぢややまで出かけてみ

た。すると西洋人は来ないで先生一人

麦藁帽むぎわらぼうを被かぶってやって来た。先生は

眼鏡めがねをとって台の上に置いて、すぐ

手拭てぬぐいで頭を包んで、すたすた浜を下り

て行った。先生が昨日きのうのように騒がし

い浴客よくかくの中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後あとが追い掛けなくなった。私は浅い水を頭の上まで跳はかして相当の深さの所はまで来て、そこから先生を目標めじろしに抜手ぬきでを切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線こせん

を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った。

三

私は次わたくしの日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶あいさつをする場合も、二人の間には起らなかった。その上先

生の態度はむしろ非社交的であつた。

一定の時刻に超然として来て、また超

然と歸つて行つた。周囲がいくら賑や

かでも、それにはほとんど注意を払う

様子が見えなかつた。最初いっしょに

来た西洋人はその後まるで姿を見せな

かった。先生はいつでも一人であつた。

或る時先生が例の通りさつさと海から上がつて来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着い

ていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は

白^{しろがすり}紘の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失^なくなったのに気が付いたと見えて、

急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛こしかけの下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといって、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後あとにつづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょ

の方角に泳いで行つた。二丁^{ちよう}ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返つて私に話し掛けた。広い蒼^{あお}い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外^{ほか}になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らし

ていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたばかりと手足の運動を已めて仰向けになったまま浪の上に寝た。私もその真似をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に

投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といつて私を促した。比較的強い体質をもった私は、もつと海の

中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。

しかし先生がどこにいるかはまだ知ら

なかった。

それから中^{なか}二日おいてちょうど三日
目の午後^ごだったと思う。先生と掛^{かけ}茶^{ちや}屋
で出会った時、先生は突然私に向かっ
て、「君はまだ大^{だい}分^{ぶん}長くここにいて、
もりですか」と聞いた。考えのない私

はこういう問いに答えるだけの用意を
頭の中に蓄えていなかった。それで
「どうだか分りません」と答えた。し
かしにやにや笑っている先生の顔を見
た時、私は急に極きまりが悪くなった。
「先生は？」と聞き返さずにはいられ

なかつた。これが私の口を出た先生と
いう言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と
いつでも普通の旅館と違って、広い寺
の境内けいだいにある別荘のような建物であつ
た。そこに住んでいる人の先生の家族

でない事も解^{わか}った。私が先生先生と呼
び掛けるので、先生は苦笑いをした。

私はそれが年長者に対する私の口癖^{くちくせ}だ
といって弁解した。私はこの間の西洋
人の事を聞いてみた。先生は彼の風変
りのところや、もう鎌倉^{かまくら}にいない事や、

色々の話をした末、日本人にさえあまり交際つきあいをもたないのに、そういう外国人と近付ちかづきになったのは不思議だといったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないとい

った。若い私はその時暗あんに相手も私と同じような感じを持っていはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈ちん吟ぎんしたあとで、「どうも君の顔には見覚みおぼえがありませんね。人

違いじゃないですか」といったので私は変に一種の失望を感じた。

四

私は^{わたくし}月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、

「これから折々お宅たくへ伺つても宜よござんすか」と聞いた。先生は単簡たんかんにただ「ええいらつしやい」といっただけであった。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛か

ったのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な

失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もっと前へ進みたくなつた。もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足

に現われて来るだろうと思った。私は
若かった。けれどもすべての人間に対
して、若い血がこう素直に働こうとは
思わなかった。私はなぜ先生に対して
だけこんな心持が起るのか解わからなかつ
た。それが先生の亡くなった今日こんにちにな

って、始めて解って来た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかったのである。先生が私に示した時々の素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかったのである。傷ましい先生は、自分

に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、ひと他をけいべつ軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数^{ひかず}があるので、そのうちに一度行っておこうと思った。しかし帰って二日三日と経^たつうちに、鎌倉^{かまくら}にいた時の気分が段々薄く

なつて来た。そうしてその上に彩られ
る大都会の空気が、記憶の復活に伴う
強い刺戟しげきと共に、濃く私の心を染め付
けた。私は往来で学生の顔を見るたび
に新しい学年に対する希望と緊張とを
感じた。私はしばらく先生の事を忘れ

た。

授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛^{たる}みができてきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しそうに自分の室^{へや}の中を見廻^{みまわ}した。私の頭には再び先生

の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなった。

始めて先生の宅うちを訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行ったのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁しみ込むように感ぜられる好い日ひより和

であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅たいていにいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだということも聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、

理由わけもない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかった。下女げじょの顔を見て少し躊躇ちゅうちゅうしてそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内うちへはいった。すると奥さんらしい人が

代って出て来た。美しい奥さんであつた。

私はその人から鄭寧ていねいに先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ぞうしがやヶ谷の墓地にある或ある仏へ花を手向けたむに行く習慣なのだそうである。

「たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうにいつてくれた。私は会え積しやくして外へ出た。賑にぎかな町の方へ一丁ちやうほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になった。先生に会

えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵きびすを回めぐらした。

五

私は墓地わたくしの手前なまにある苗畠なえばたけの左側からはいって、両方かえでに楓かえでを植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。すると

その端^{はす}れに見える茶店^{ちやみせ}の中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡^{めがね}の縁^{ふち}が日に光るまで近く寄って行った。そうして出し拔けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留^{とど}まって私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍^{へん}繰り返した。

その言葉は森閑^{しんかん}とした昼^{うち}の中に異様な

調子をもって繰り返された。私は急に

何とも応^{こた}えられなくなった。

「私の後^{あと}を跟^つけて来たのですか。どう

して……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情の中には判然はつきりいえないような一種の曇りがあった。

私は私がどうしてここへ来たかを先

生に話した。

「誰^{だれ}の墓へ参りに行ったか、妻^{さい}がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおつしやい
ません」

「そうですか。——そう、それはいう

はずがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心とくしんしたらしい様子であつた。しかし私にはその意味がまるで解わからなかった。

先生と私は通りへ出ようとして墓

の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だ
の、神僕ロギンの墓だのという傍に、
一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが
建ててあつた。全権公使何々というの
もあつた。私は安得烈と彫り付けた小
さい墓の前で、「これは何と読むんで

しょう」と先生に聞いた。「アンドレ
とでも読ませるつもりでしょうね」と
いって先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々
の様式に対して、私ほどに滑稽こっけいもアイ
ロニーも認めてないらしかった。私が

丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指
して、しきりにかれこれいいたがるの
を、始めのうちは黙って聞いていたが、
しまいには「あなたは死という事実をま
だ真面目に考えた事ありませんね」
といった。私は黙った。先生もそれぎ

り何ともいわなくなった。

墓地の区切り目に、大きな銀杏いちょうが一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢こずえを見上げて、「もう少しすると、綺麗きれいですよ。この木がすっかり黄葉こうようして、ここいらの地

面は金色の落葉で埋まるようになり
ます」といった。先生は月に一度ずつは
必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹の地面をならして新
墓地を作っている男が、鍬の手を休め
て私たちを見ていた。私たちはそこか

ら左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的あてのな

い私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行

った。先生はいつもより口数を利きかな

かった。それでも私はさほどの窮屈を

感じなかったので、ぶらぶらいっしょ

に歩いて行つた。

「すぐお宅へお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるん

ですか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。――」

ご親類のお墓ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。

私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町^{ちやう}ほど歩いた後^{あと}で、先生が不意にそこへ戻って来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月^{まいげつ}お参りをなさる

んですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかつた。

六

私はそれから時々先生を訪問するよ

うになった。行くたびに先生は在宅であつた。先生に会う度数とすうが重なるにつれて、私はますます繁しげく先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶あいさつをした時も、懇意になつたそ

の後も、あまり変りはなかった。先生は何時いつも静かであつた。ある時は静か過ぎて淋さびしいくらいであつた。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいけない

という感じが、どこかに強く働いた。

こういう感じを先生に対してもつていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後^{のち}になって事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々

しいといわれても、馬鹿^{ばか}げていると笑
われても、それを見越した自分の直覺
をとにかく頼^{たの}もしくまた嬉^{うれ}しく思っ
ている。人間を愛し得^うる人、愛せずには
いられない人、それでいて自分の懷^{ふところ}に
入^いろうとするものを、手をひろげて抱

き締める事のできない人、——これが先生であつた。

今いつた通り先生は始終静かであつた。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射す^さように。射す

かと思うと、すぐ消えるには消えたが。
私が始めてその曇りを先生の眉間に認
めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に
先生を呼び掛けた時であった。私はそ
の異様の瞬間に、今まで快く流れてい
た心臓の潮流をちよつと鈍らせた。し

かしそれは単に一時の結滞^{けつたい}に過ぎなかった。私の心は五分と経^たたないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春^{こはる}の尽きるに間^まのない或^ある

晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏いちろうの大樹たいじゅを眼めの前に想おもい浮かべた。勘定してみる
と、先生が毎月例まいげつれいとして墓参ぼさんに行く日が、それからちやうど三日目に当って

いた。その三日目は私の課業が午で終
える楽な日であった。私は先生に向か
ってこういった。

「先生ぞうし雑司がやケ谷の銀杏はもう散ってし
まったでしょうか」

「まだ空坊主からぼうずにはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守った。そうしてそこからしばし眼を離さなかつた。私はすぐいった。

「今度お墓参りにいらつしやる時にお伴をしても宜ござんすか。私は先生といつしよにあすこいらが散歩してみ

たい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでに散歩をなすったら
ちょうど好^いいじゃありませんか」

先生は何とも答えなかった。しばらく

くしてから、「私のは本当の墓参りだ
けなんだから」といつて、どこまでも
墓参ぼさんと散歩を切り離そうとする風ふうに見
えた。私と行きたくない口実だか何だ
か、私にはその時の先生が、いかにも
子供らしくて変に思われた。私はなお

と先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでも好^いからいっしょに伴^っれて行^って下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのであ

る。すると先生の眉がちよつと曇つた。

眼のうちにも異様の光が出た。それは

迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられ

ない微かな不安らしいものであつた。

私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛

けた時の記憶を強く思い起した。二つ

の表情は全く同じだったのである。

「私は」と先生がいった。「私はあな

たに話す事のできないある理由があつ

て、他ひとといっしょにあすこへ墓参りに

は行きたくないのです。自分の妻さいさえ

まだ伴れて行った事がないのです」

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむし

ろ尊たつとむべきものの一つであつた。私は

全くそのために先生と人間らしい温か

い交際つきあいができたのだと思う。もし私の

好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、

研究的に働き掛けたなら、二人の間を

繋つなぐ同情の糸は、何の容赦もなくその

時ふつりと切れてしまったろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊^{たつと}いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞっとする。先生

はそれでも、冷たい眼まなこで研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず

先生の宅うちへ行くようになった。私の足

が段々繁しげくなった時のある日、先生は

突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやって来るのですか」

「何でといって、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔じやまなんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同

郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆みなな私ほど先生に親みなしきをもっていないように見受けられた。

「私は淋さびしい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を

喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといって聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳いくつですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる
不得要領ふとくようりょうのものであったが、私はその
時底そこまで押さずに帰つてしまった。し
かもそれから四日と経たたないうちにま
た先生を訪問した。先生は座敷へ出る
や否いなや笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私は外ほかの人からこういわれたらきつと癩しやくに触さわつたろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であ

った。癩に触らないばかりでなくかえ
って愉快だった。

「私は淋^{さび}しい人間です」と先生はその
晩またこの間の言葉を繰り返した。

「私は淋しい人間ですが、ことによる
とあなたも淋しい人間じゃないですか。

私は淋しくつても年を取っているから、
動かずにいられるが、若いあなたはそ
うは行かないでしょう。動けるだけ
動きたいでしょう。動いて何かに打
つかりたいでしょう……」

「私はちつとも淋しくはありません」

「若いうちほど淋^{さび}しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅^{うち}へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会ってもおそろくまだ

淋しい気がどこかでしているでしょう。

私にはあなたのためにその淋しさを

根元から引き抜いて上げるだけの力が

ないんだから。あなたは外の方を向い

て今に手を広げなければならなくなり

ます。今に私の宅の方へは足が向かな

くなります」

先生はこういつて淋しい笑い方をした。

八

幸さいわいにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私わたくしは、こ

の予言の中うちに含まれている明白な意義
さえ了解し得なかった。私は依然とし
て先生に会いに行つた。その内うちいつの
間にか先生の食卓で飯めしを食うようにな
つた。自然の結果奥さんとも口を利きか
なければならぬようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因かどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合

う知りもしない女に向かって多く働く
だけであった。先生の奥さんにはその
前玄関で会った時、美しいという印象
を受けた。それから会うたんびに同じ
印象を受けない事はなかった。しかし
それ以外に私はこれといってとくに奥

さんについて語るべき何物ももたない
ような気がした。

これは奥さんに特色がないというよ
りも、特色を示す機会が来なかったの
だと解釈する方が正當かも知れない。
しかし私はいつでも先生に付属した一

部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらになつていた。それで始めて知り合いにな

った時の奥さんについては、ただ美しいという外ほかに何の感じも残っていない。

ある時私は先生の宅うちで酒を飲うまされた。その時奥さんおくさんが出て来て傍そばで酌しやくをしてくれた。先生はいつもより愉快そ

うに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取った。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇

の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下しものような会話がしまつた。

「珍しい事。私に吞めとおつしやつた事は滅多めったにないのにね」

「お前は嫌いだからさ。しかし稀たまには飲むといいよ。好い心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりでもあなたは大変ご愉快ゆかいそうね、少し酒しゅを召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもというわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好いい心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると
宜よござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなくて好いいから」

先生の宅は夫婦と下女だけであった。
行くたびに大抵はひそりとしていた。

高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は宅の中にもいるものは先生と私だけのよう気がした。
「子供でもあると好いんですがね」と

奥さんは私の方を向いていった。私は「そうですね」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。

「一人貰^{もら}ってやろうか」と先生がいった。

「貰^{もら}ッ子じや、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経^たったってできっこないよ」と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」
と私が代りに聞いた時先生は「天罰だ
からさ」といつて高く笑った。

九

私の知る限り先生と奥さんとは、仲
のいい夫婦の一对であった。家庭の一

員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無論解わからなかったけれども、座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、下女げじょを呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。（奥さんの名は静しずといった）。先生は「おい

静」といつでも襖ふすまの方を振り向いた。

その呼びかたが私には優しく聞こえた。

返事をして出て来る奥さんの様子も甚はなは

だ素直であつた。ときたまご馳走ちそうにな

つて、奥さんが席へ現われる場合など

には、この関係が一層明らかに二人の

間に描き出されるようであつた。^{あいた えが}

先生は時々奥さんを伴^つれて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根^{はこね}から貰^えつた絵端書^{えはがき}をまだ

持っている。日光にっこうへ行つた時は紅葉もみじの葉を一枚封じ込めた郵便も貰った。

当時の私の眼に映った先生と奥さんの間柄はまずこんなものであった。そのうちにたった一つの例外があった。

ある日私がいつもの通り、先生の玄関

から案内を頼もうとすると、座敷の方
でだれかの話し声がした。よく聞くと、
それが尋常の談話でなくって、どうも
言逆いさかいらしかった。先生の宅は玄関の
次がすぐ座敷になっているので、格子こうし
の前に立っていた私の耳にその言逆いさかい

の調子だけはほぼ分った。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まって来る男の方の声で解った。相手は先生よりも低い音おんなので、誰だか判然はつきりしなかったが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようにも

あった。私はどうしたものだろうと思
って玄関先で迷ったが、すぐ決心をし
てそのまま下宿へ帰った。

妙に不安な心持が私を襲って来た。

私は書物を読んでも呑み込む能力を失
ってしまった。約一時間ばかりすると

先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。
私は驚いて窓を開けた。先生は散歩し
ようといつて、下から私を誘った。

先刻帯の間へ包くるんだままの時計を出し
て見ると、もう八時過ぎであつた。私
は帰はかつたなりまだ袴はかまを着けていた。私

はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といっしょに麦酒^{ビール}を飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目だめです」といって先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終さつしゅの事が引ひつ懸かっていた。肴さかなの骨が咽喉のどに刺さった

時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止よした方が好よかろうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。「実は私も

少し変なですよ。君に分りますか」
私は何の答えもし得なかった。

「実は先刻妻と少し喧嘩けんかをしてね。それで下らない神経くだけを昂奮こうふんさせてしまったんです」と先生がまたいった。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来
なかった。

「妻が私を誤解するのです。それを誤
解だといって聞かせても承知しないの
です。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんで

すか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、こ

れも私には想像の及ばない問題であつた。

十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀かわいそうなものですね。私わたくしの妻などは私より外ほかにまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切とぎれ

だが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移って行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中位ちゅうぐらいに見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅うちへ帰るには私の下宿のついでそばを通るのが順路であった。私はそこ

まで来て、曲り角で分れるのが先生に
濟まないような気がした。「ついでに
お宅の前までお伴ともしましょうか」とい
った。先生は忽ち手たちまで私を遮さへぎった。

「もう遅いから早く帰りましたまゑ。私も
早く帰ってやるんだから、妻君さいくんのた

めに」

先生が最後に付け加えた「妻君のため」 という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰ってから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君の

ために」という言葉をお忘れなかった。

先生と奥さんの間に起った波瀾が、

大したものでない事はこれでも解った。

それがまた滅多に起る現象でなかった

事も、その後絶えず出入りをして来た

私にはほぼ推察ができた。それどころ

か先生はある時こんな感想すら私に洩もらした。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻さい以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しか

い男と思ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の「いっせい」対であるべきはず
です」

私は今前後の行き掛ゆりを忘れてしまったから、先生が何のためにこんな自

白を私にして聞かせたのか、判然はつきりいう
事ができない。けれども先生の態度の
真面目まじめであつたのと、調子の沈んでい
たのとは、いまだに記憶に残っている。
その時ただ私の耳に異様に響いたのは、
「最も幸福に生れた人間の一对である

べきはずです」という最後の一句であった。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきはずであると断わったのか。私にはそれだけが不審であった。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であった。先生は事

実はたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中で疑^{うち}らざるを得^{うたぐ}なかった。けれどもその疑^{ほうむ}いは一時限りどこかへ葬^{ほうむ}られてしまった。

私はそのうち先生の留守に行つて、

奥さんと二人差向いで話をする機会に

出合つた。先生はその日横浜を出帆す

る汽船に乗って外国へ行くべき友人を

新橋へ送りに行つて留守であつた。横

浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車

で新橋を立つのはその頃の習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義と

してその日突然起った出来事であつた。
先生はすぐ帰るから留守でも私に待つ
ているようにといい残して行つた。そ
れで私は座敷へ上がって、先生を待つ
間、奥さんと話をした。

その時の私わたくしはすでに大学生であった。
始めて先生の宅うちへ来た頃ころから見るとず
っと成人した気でいた。奥さんとも
大分懇意だいふになった後のちであった。私は奥
さんに対して何の窮屈きよくも感じなかった。
差向さむかいで色々の話をした。しかしそれ

は特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまった。そのうちでたった一つ私の耳に留まったものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断っておきたい事がある。

先生は大学出身であった。これは始

めから私に知れていた。しかし先生の
何もしないで遊んでいるという事は、
東京へ帰って少し経^たってから始めて分
った。私はその時どうして遊んでい
れるのかと思った。

先生はまるで世間に名前を知られて

いない人であつた。だから先生の学問
や思想については、先生と密切みっせつの關係
をもっている私より外ほかに敬意を払うも
ののあるべきはずがなかった。それを
私は常に惜おしい事だといった。先生は
また「私のようなものが世の中へ出て、

口を利^きいては済^きまない」と答^こえるざり
で、取り合^あわなかつた。私にはその答
えが謙遜^{けんそん}過ぎてかえつて世間を冷評^{れいへう}す
るようにも聞^きこえた。實際先生は時々
昔の同級生で今著名になつてゐる誰^{だれ}彼^{かれ}
を捉^{とら}えて、ひどく無遠慮な批評を加え

る事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々うんぬんしてみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向か

って働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」といった。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解^{わか}らなかったけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いも

のだったので、私はそれぎり何もいう
勇気が出なかった。

私が奥さんと話している間に、問題
が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えた

り勉強したりなさるだけで、世の中へ
出て仕事をなさらないんでしょう」

「あの人は駄目だめですよ。そういう事が
嫌いなんですから」

「つまり下くだらない事だと悟さとっていらっ
しゃるんでしょうか」

「悟るの悟らないのって、——そりや女だからわたくしには解りませんけれど、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょう。それでいてできないんです。だから気の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいって、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんです」

しょう」

「それが解^{わか}らないのよ、あなた。それが解^{わか}るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があっ

た。それでも口元だけには微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真面目まじめだった。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんで

すよ。若い時はまるで違っていました。
それが全く変ってしまったんです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらっ

しゃったんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。

十二

奥さんは東京の人であった。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは「本当いう

と合あいの子こなんですよ」といった。奥さんの父親はたしか鳥取とっとりかどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸と
いった時分じぶんの市ヶ谷いちがやで生れた女なので、
奥さんは冗談半分そうだったのである。
ところが先生は全く方角違いの新潟にいがた県

人であつた。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであつた。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずにお

いた。

先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何もかも聞き得なかった。私は時

によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎んでいるのだろうと思った。

時によると、またそれを悪くも取った。先生に限らず、奥さんに限らず、二人

とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶^{つや}っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もつともどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏にも、

二人の結婚の奥に横たわる花やかなロ
マンスの存在を仮定していた。

私の仮定ははたして誤らなかつた。

けれども私はただ恋の半面だけを想像
に描き得たに過ぎなかつた。先生は美
しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っ

ていた。そうしてその悲劇のどんなに

先生にとって見^み惨^{じめ}なものであるかは相

手の奥さんにまるで知れていなかった。

奥さんは今でもそれを知らずにいる。

先生はそれを奥さんに隠して死んだ。

先生は奥さんの幸福を破壊する前に、

まず自分の生命を破壊してしまった。

私は今この悲劇について何事も語ら

ない。その悲劇のためにむしろ生れ出

たともいえる二人の恋愛については、

先刻さつきいった通りであつた。二人とも私

にはほとんど何も話してくれなかった。

奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時花時分に私は先生といっしょに上野へ行った。そうしてそこで美しい一対の男女を見た。彼らは睦ま

じそくに寄り添って花の下を歩いて
いた。場所が場所なので、花よりもそ
ちらを向いて眼を峙^{そは}だてている人が沢
山あった。

「新婚の夫婦のようだね」と先生が
いった。

「仲が好よさそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかった。二人の男女を視線の外ほかに置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷評ひやかしま

したね。あの冷評ひやかしのうちには君が恋を
求めながら相手を得られないという不
快の聲が交まじっていきましょう」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わって
いる人はもっと暖かい声を出すもので

す。しかし……しかし君、恋は罪悪で
すよ。解^{わか}っていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事を
しなかった。

十三

我々は群集の中にいた。群集はいず

れも嬉しそうな顔をしていた。そこを
通り抜けて、花も人も見えない森の中
へ来るまでは、同じ問題を口にする機
会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私がその時突然
聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなた

の心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であつた。思いあたるようなものは何にもなかつた。

「私の胸の中にこれという目的物は一
つありません。私は先生に何も隠し
てはいないつもりです」

「目的物がないから動くのです。あれ
ば落ち付けるだろうと思って動きたく
なるのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。しかし

それは恋とは違います」

「恋に上る楷^{のぼ}段^{かいだん}なんです。異性と抱き

合う順序として、まず同性の私の所へ
動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことに
しているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうし
てもあなたに満足を与えられない人間

なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。

しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお願いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、――君、黒い長い髪で縛られた時の心持を

知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実

としては知らなかった。いずれにして

も先生のいう罪悪という意味は朦朧^{もうろう}と

してよく解^{わか}らなかった。その上私は少

し不愉快になった。

「先生、罪惡という意味をもつと判然はつきりいって聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪惡という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実をまこと

話している気でいた。ところが実際は、
あなたを焦慮^{じら}していたのだ。私は悪い
事をした」

先生と私とは博物館の裏^{うぐいすだに}から鶯溪^{うぐいすだに}の
方角に静かな歩調で歩いて行った。垣
の隙間^{すきま}から広い庭の一部に茂る熊笹^{くまざさ}が

幽邃^{ゆうすい}に見えた。

「君は私がなぜ毎月^{まいげつ}雑司^{ぞうし}ヶ谷^{がや}の墓地に
埋^{うま}っている友人の墓へ参るのか知って
いますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。
しかも先生は私がこの問いに対して答

えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかった。すると先生は始めて気が付いたようにこういった。

「また悪い事をいった。焦慮じょろせるのが悪いと思つて、説明しようとする」と、

その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めやましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

私には先生の話がますます解わからなく

なった。しかし先生はそれぎり恋を口
にしなかった。

十四

年の若い私わたくしはややとすると一図いちずに
なりやすかった。少なくとも先生の眼
にはそう映っていたらしい。私には学

校の講義よりも先生の談話の方が有益
なのであった。教授の意見よりも先生
の思想の方が有難いのであった。とど
の詰まりをいえば、教壇に立つて私を
指導してくれる偉い人々よりもただ独ひと
りを守って多くを語らない先生の方が

偉く見えたのであった。

「あんまり逆上のぼせちゃいけません」と先生がいった。

「覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯がうけつてくれない。

かった。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭いやになります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して

見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。

その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をばたばた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があった。

「信用しないって、特にあなたを信用
しないんじゃない。人間全体を信用し
ないんです」

その時生垣いけがきの向うで金魚売りらしい
声がした。その外ほかには何の聞こえるも
のもなかった。大通りから二丁ちようも深く

折れ込んだ小路は存外静かであつた。
家の中はいつもの通りひっそりしてい
た。私は次の間に奥さんのいる事を知
つていた。黙つて針仕事か何かしてい
る奥さんの耳に私の話し声が聞こえる
という事も知っていた。しかし私は全

くそれを忘れてしまった。

「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していないので

す。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになって
いるのです。自分を呪^{のろ}うより外^{ほか}に仕方
がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だって
確かなものはないでしょう」

「いや考えたんじゃない。やったんです。やった後で驚いたんです。そうして非常に怖こわくなったんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿たどって行きたかった。すると襖ふすまの陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度

聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間まへ呼んだ。二人の間まにどんな用事が起つたのか、私には解わからなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ歸つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺あざむかれた返報に、残酷な復讐ふくしゅうをするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝ひざの前に跪ひざまずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬しりぞを斥しりぞけたいと思うのです。私は今より一層淋さびしい未来の私を我慢する代り

に、淋しい今の私を我慢したいのです。
自由と独立と己^{おの}れとに充^みちた現代に生
れた我々は、その犠牲としてみんなこ
の淋しみを味わわなくてはならないで
しょう」

私はこういう覚悟をもっている先生

に對して、いふべき言葉を知らなかつた。

十五

その後私は奥さんの顔を見るたびに氣になつた。先生は奥さんに對しても始終こういう態度に出るのだろうか。

もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに

尋常であつたから。最後に先生のいる
席でなければ私と奥さんとは滅多に顔
を合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。

先生の人間に対するこの覚悟はどこか
ら来るのだろうか。ただ冷たい眼で自

分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだろうか。先生は坐^{すわ}って考える質^{たち}の人であつた。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐^{すわ}って世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかつ

た。先生の覚悟は生きた覚悟らしかった。火に焼けて冷却し切った石造家屋の輪廓とは違っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれている

らしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。

これは私の胸で推測するがものはない

い。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯みねのようであつた。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽おほい被かぶせた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解わからなかつた。告白はぼうとしていた。それで

いて明らかに私の神経を震ふるわせた。

私は先生のこの人生観の基点に、或ある強烈な恋愛事件を仮定してみた。

（無論先生と奥さんとの間に起った）。

先生ががかつて恋は罪悪だといった事から照らし合せて見ると、多少それが

手掛りにもなった。しかし先生は現に
奥さんを愛していると私に告げた。す
ると二人の恋からこんな厭世に近い覚
悟が出ようはずがなかった。「かつて
はその人の前に跪いたという記憶が、
今度はその人の頭の上に足を載せさせ

ようにする」といった先生の言葉は、
現代一般の誰彼^{たれかれ}について用いられるべ
きで、先生と奥さんの間には当てはま
らないもののものであった。

雑司^{ぞうしがや}ヶ谷にある誰^{だれ}だか分らない人の
墓、——これも私の記憶に時々動いた。

私はそれが先生と深い縁故のある墓だ
という事を知っていた。先生の生活に
近づきつつありながら、近づく事ので
きない私は、先生の頭の中にある生命^{いのち}
の断片として、その墓を私の頭の中にも
受け入れた。けれども私に取ってそ

の墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはならなかった。むしろ二人の間に立って、自由の往来を妨げる魔物のようであった。

そうこうしているうちに、私はまた

奥さんと差し向いで話をしなければなら
ない時機が来た。その頃は日の詰つ
て行くせわしない秋に、誰も注意を惹
かれる肌寒の季節であつた。先生の
附近で盗難に罹つたものが三、四日続
いて出た。盗難はいずれも宵の口であ

った。大したものを持って行かれた家^{うち}はほとんどなかったけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さんは氣味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空^あけなければならぬ事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方

の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外ほかの二、三名と共に、ある所でその友人に飯めしを食わせなければならなくなった。先生は訳を話して、私に帰ってくる間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。

十六

私^{わたくし}の行^いつたのはまだ灯^ひの点^つくか点^つかない暮^きれ方^{よう}であつたが、几帳^{きちょうめん}面^{めん}な先生^{せんせい}はもう宅^{うち}にいなかった。「時間^{じかん}に後^{おく}れ
る」と悪いって、つい今しがた出掛^{でかけ}けま
した」といった奥^{おく}さんは、私^{わたし}を先生^{せんせい}の

書齋へ案内した。

書齋には洋机テーブルと椅子いすの外ほかに、沢山の

書物が美しい背皮せがわを並べて、硝子越ガラスこしに

電燈でんとうの光で照らされていた。奥さんは

火鉢の前に敷いた座蒲団ざぶたんの上へ私を坐すわ

らせて、「ちつとそこいらにある本で

も読んでいて下さい」と断って出て行った。私はちょうど主人の帰りを待ち受ける客のような気がして済まなかった。私は畏^{かしこ}まったまま烟草^{タバコ}を飲んでいた。奥さんが茶の間で何か下女^{げじょ}に話している声が聞こえた。書斎は茶の間の

縁側を突き当って折れ曲った角^{かど}にある
ので、棟^{むね}の位置からいうと、座敷より
もかえって掛け離れた静かさを領^{りょう}して
いた。ひとしきりで奥さんの話し声^{こえ}が
已^やむと、後^{あと}はしんとした。私は泥棒を
待ち受けるような心持で、凝^{じっ}としなが

ら気をどこかに配った。

三十分ほどすると、奥さんがまた書

斎の入口へ顔を出した。「おや」とい

って、軽く驚いた時の眼を私に向けた。

そうして客に来た人のように鹿爪しかづめらし

く控えている私をおかしそうに見た。

「それじゃ窮屈でしょう」

「いえ、窮屈じゃありません」

「でも退屈でしょう」

「いいえ。泥棒が来るかと思つて緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちやちやわんを持ったまま、

笑いながらそこに立っていた。

「ここは隅っこだから番をするには好くありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもっと真中へ出て来て頂戴。ご退屈だろうと思って、お茶を入れて持って来たんですが、茶の間

で宜^{よろ}しければあちらで上げますから」

私は奥さんの後^{あと}に尾^ついて書斎を出た。

茶の間には綺麗^{きれい}な長火鉢^{ながひばち}に鉄瓶^{てつびん}が鳴っ

ていた。私はそこで茶と菓子のご馳走^{ちそう}

になった。奥さんは寝^ねられないといけ

ないといって、茶碗に手を触れなかつ

た。

「先生はやっぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」

「いいえ滅多に出た事はありません。

近頃は段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」

こういった奥さんの様子に、別段困ったものだという風も見えなかったの
で、私はつい大胆になった。

「それじゃ奥さんだけが例外なんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なん

です」

「そりや嘘うそです」と私がいった。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きに

なっただから世間が嫌いになるんです
もの」

「あなたは学問をする方^{かた}だけあって、
なかなかお上手^{じょうず}ね。空^{から}っぽな理屈を使
いこなす事が。世の中が嫌いになっ
たから、私までも嫌いになったんだとも

いわれるじゃありませんか。それと同おんなじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だからさかずきけなさるのね、面白そうに。空の盃で

よくああ飽きずに猷酬けんしゅうができると思
いますわ」

奥さんの言葉は少し手痛てひとかった。し
かしその言葉の耳障みみざわりからいうと、決し
て猛烈なものではなかった。自分に頭
脳のある事を相手に認めさせて、そこ

に一種の誇りを見出す^{みいだ}ほどに奥さんは
現代的でなかった。奥さんはそれより
もっと底の方に沈んだ心を大事にして
いるらしく見えた。

十七

私は^{わたくし}まだその後^{あと}にいうべき事をもつ

ていた。けれども奥さんから徒ら^{いたず}に議論を仕掛ける男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗^{こうちやちやわん}の底を覗^{のぞ}いて黙っている私を外^そらさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶

碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？　一つ？　二つつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥

さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入

れる砂糖の数を聞いた。奥さんの態度

は私に媚びるというほどではなかった

けれども、先刻さつきの強い言葉を力つとめて打ち消そうとする愛嬌あいぎょうに充みちていた。

私は黙って茶を飲んだ。飲んでしまっても黙っていた。

「あなた大変黙り込んじまったのね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱^{しか}り付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒口^{いとぐち}にまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある

先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しわ
せて下さいませんか。奥さんには空からな
理屈と聞こえるかも知れませんが、私
はそんな上うわの空そらでいつてる事じゃない
んだから」

「じゃおつしやい」

「今奥さんが急にいなくなつたとして
ら、先生は現在の通りで生きていられ
るでしょうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな
事、先生に聞いて見るより外ほかに仕方が

ないじゃありませんか。私の所へ持つて来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真面目まじめですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直にいつて私には分らな

いのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」

「何もそんな事を開き直って聞かなく

「とても好^いいじゃありませんか」

「真面目くさって聞くがものはない。
分り切つてるとおっしゃるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急
にいなくなったら、先生はどうなるん

でしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見えてじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるで

しょうか」

「そりゃ私から見れば分っています。

（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、

己惚おのぼれになるようですが、私は今先生を

人間としてできるだけ幸福にしている
んだと信じていますわ。どんな人があ
っても私ほど先生を幸福にできるもの
はないとまで思い込んでいますわ。そ
れだからこうして落ち付いていられる

んです」

「その信念が先生の心に好く映るはず
だと私は思います」

「それは別問題ですわ」

「やっぱり先生から嫌われているとお
っしゃるんですか」

「私は嫌われてるとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんですよ。世間というより近頃ちかごろでは人間が嫌いになってるんですよ。だからその人間の一人いちにんとして、私も好かれるはずがない

「じゃありませんか」

奥さんの嫌われているという意味が
やっと私に呑み込めた。

十八

私は奥さんわたくしの理解力に感心した。奥
さんの態度が旧式の日本の女らしくな

いところも私の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行ころはやり始めた。いわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際つまあいをした経験のない迂闊うかつな青年であった。男と

しての私は、異性に対する本能から、
憧憬^{どうけい}の目的物として常に女を夢みてい
た。けれどもそれは懐かしい春の雲を
眺^{なが}めるような心持で、ただ漠然^{ばくぜん}と夢み
ていたに過ぎなかった。だから実際の
女の前へ出ると、私の感情が突然変る

事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥力はんばつりよくを感じた。奥さんに対した私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均という考えも

ほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なされないのだろうと

いって、あなたに聞いた時に、あなたは
おっしゃった事がありますね。元は
ああじゃなかったんだって」

「ええいしました。実際あんなじゃな
かったんですもの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじゃありません、段々あなっ

て来たのよ」

「奥さんはその間^{あいだ}始終先生といっしょにいらしたんでしょう」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう変^{へん}って行かれる源^{げん}因^{いん}がちやんと解^{わか}るべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると実に辛い^{つら}んですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何^{なん}遍^{べん}あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合ってくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を

途切^{とぎ}らした。下女部屋^{げじょべや}にいる下女はこ
とりとも音をさせなかった。私はまる
で泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思っ
てやしませんか」と突然奥さんが聞い
た。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいって下さい。そう
思われるのは身を切られるより辛いん
だから」と奥さんがまたいった。「こ
れでも私は先生のためにできるだけの
事はしているつもりなんです」

「そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防^{しんぼう}し切れなくなって、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいって下さい、改められる欠点なら改めるからって、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだというん

です。そういわれると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた。

十九

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私がその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変わって来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かし始めた。自

分と夫の間には何の蟠^{わだか}まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開^あけて見^み極^{きわ}めようとすると、やはり何^{なん}にもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼

が厭世^{えんせい}的だから、その結果として自分
も嫌われているのだと断言した。そう
断言しておきながら、ちつともそこに
落ち付いていられなかった。底を割る
と、かえってその逆を考えていた。先
生は自分を嫌う結果、とうとう世の中

まで厭いやになったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかった。先生の態度はどこまでも良人おっとらしかった。親切で優しかった。疑いの塊かたまりをその日その日の情合じょうあいで包

んで、そつと胸の奥にしまっておいた
奥さんは、その晩その包みの中を私の
前で開けて見せた。

「あなたどう思つて？」と聞いた。

「私からあんなつたのか、それともあ
なたのいう人世観じんせいかんとか何とかいうもの

から、ああなつたのか。隠さずいつて
頂戴」ちようだい

私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるは

ずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解わかりません」

奥さんは予期はずの外れた時に見る憐れあわな表情をその咄嗟とっさに現わした。私はす

ぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌っていらつ
しゃらない事だけは保証します。私は

先生自身の口から聞いた通りを奥さん
に伝えるだけです。先生は嘘を吐かな
い方かたでしょう」

奥さんは何とも答えなかった。しばらくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになった原因げんいんについてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい渋って膝ひざの上に置いた

自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すって。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱しかられないところだ

けよ」

私は緊張して唾液を呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あったのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「実は変死したんです」といった。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であつた。

「それっ切りしかいえないのよ。けれ

どもその事があつてから後のちなんです。

先生の性質が段々變つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思わない事

もないのよ」

「その人の墓ですか、雑司がや雑司ヶ谷にあるのは」

「それもいわない事になってるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるも

の
で
し
ょ
う
か。
私
は
そ
れ
が
知
り
た
く
つ
て
堪
ら
な
い
ん
で
す。
だ
か
ら
そ
こ
を
一
つ
あ
な
た
に
判
断
し
て
頂
き
た
い
と
思
う
の
」
私
の
判
断
は
む
し
ろ
否
定
の
方
に
傾
い
て
い
た。

わたくし

私は私のつらまえた事実の許す限り、

奥さんを慰めようとした。奥さんもま

たできるだけ私によって慰められたそ

うに見えた。それで二人は同じ問題を

いつまでも話し合った。けれども私は

もともと事の大根おおねを攫つかんでいなかった。

奥さんの不安も実はそこに漂^{ただよ}う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉^{すっかり}皆は私に話す事ができなかった。したがって慰める私も、慰められる奥

さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、おぼつか覚束ない私の判断にすが縋り付こうとした。

十時頃ごろになって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までの

すべてを忘れたように、前に坐^{すわ}って
る私をそっちのけにして立ち上がった。
そうして格^{こう}子^しを開ける先生をほとんど
出^で合^あい頭^{がしら}に迎えた。私は取り残されな
がら、後^{あと}から奥^{おく}さんに尾^ついて行^いった。
下^げ女^{じょ}だけは仮^う寝^たでもしていたとみえて、

ついに出て来なかった。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜^{たま}った涙の光と、それから黒い眉毛^{まゆげ}の根に寄せられた八の字を記憶していた私は、

その変化を異常なものとして注意深く
眺めた。ながもしそれが詐りいつわでなかったな
らば、（実際それは詐りとは思えな
かったが）、今までの奥さんの訴えは
感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵こしら
えた、徒らな女性いたずの遊戯と取れない事

もなかった。もっともその時の私には
奥さんをそれほど批評的に見る気は起
らなかった。私は奥さんの態度の急に
輝いて来たのを見て、むしろ安心した。
これならばそう心配する必要もなかつ
たんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦勞さ
ま、泥棒は来ませんでしたか」と私に
聞いた。それから「来ないんで張合はりあいが
抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒
さま」と会釈した。その調子は忙しい

ところを暇を潰^{つぶ}させて気の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がはいらなくって気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそういういながら、先刻^{さつぎ}出した西洋菓子^{さつぎ}の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂^{たもと}

へ入れて、人通りの少ない夜寒の小路
を曲折して賑やかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽
き抜いてここへ詳しく書いた。これは
書くだけの必要があるから書いたのだ
が、実をいうと、奥さんに菓子を貰っ

て帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日よくじつひるめし午飯を食いに学校から帰つてきて、昨夜机の上に載のせて置いた菓子ゆうべの包みを見ると、すぐその中からチョコレートとびいろを塗った鳶色のカステラを出し

て頬張^{ほちば}った。そうしてそれを食う時に、

必竟^{ひつぎよう}この菓子^{かし}を私にくれた二人の男女^{なんによ}

は、幸福な一対^{いっつい}として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅^{うち}へ出^ではいりを

するついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだ。それまで縋絆というものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであつた。子供のない奥さんは、そうい

う世話を焼くのがかえって退屈たいくつに
なつて、結句けっく身体からだの薬くすりだらいの事を
いつていた。

「こりや手織ておりね。こんな地じの好い着
物は今まで縫ぬった事がないわ。その代
り縫ぬい悪にくいのよそりやあ。まるで針が

立たないんですもの。お蔭^{かげ}で針を二本
折りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さん
は別に面倒^{めんどう}くさいという顔をしなかつ
た。

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てく

れと頼むように付け足してあつた。

父はかねてから腎臓じんぞうを病んでいた。

中年以後の人にしばしば見る通り、父

のこの病は慢性やまいであつた。その代り要

心さえしていれば急変のないものと当

人も家族のものも信じて疑わなかつた。

現に父は養生のお蔭かげ一つで、今日こんにちまで
どうかこうかしの凌いで来たように客が来
ると吹聴ふいちようしていた。その父が、母の書
信によると、庭へ出て何かしている機はずみ
に突然眩暈めまいがして引ッ繰り返った。
家内かないのものは軽症の脳溢血のういつけつと思ひ違え

て、すぐその手当をした。後あとで医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間まがあっ

た。私は学期の終りまで待っていても
差支^{さしつか}えあるまいと思って一日二日その
ままにしておいた。するとその一日二
日の間に、父の寝ている様子だの、母
の心配している顔だのが時々眼に浮か
んだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗^な

めた私は、とうとう帰る決心をした。

国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪の気味で、座敷へ出

るのが臆^{おつく}劫^ぐだといって、私をその書齋
に通した。書齋の硝子^{ガラス}戸^どから冬に入^いっ
て稀^{まれ}に見るような懐^{なつ}かしい和^{やわ}らかな日
光^{ひかり}が机^{つくえ}掛けの上に射^さしていた。先生は
この日あたりの好^い室^{へや}の中へ大きな火
鉢^{ひし}を置いて、五^ご徳^{とく}の上に懸^かけた金盥^{かなだら}か

ら立ち上る湯気で、呼吸の苦しくなるのを防いでいた。

「大病は好いが、ちょっとした風邪なとはかえって厭なものですね」といった先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のな
い人であつた。先生の言葉を聞いた私
は笑いたくなつた。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、
それ以上の病氣は眞平まっぴらです。先生だつ
て同じ事でしょう。試みにやつてご覧

になるとよく解わかります」

「そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹かかりたいと思ってる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかった。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりゃ困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それを奥の茶箆筒ちゃだんすか何かの抽出ひきだしから出して来

た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧ていねいに重ねて、「そりゃご心配ですね」といった。

「何遍なんべんも卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。

——そんなに何度も引ッ繰り返るもの
ですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の
父と同じ病気で亡くなったのだという
事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いが。――嘔気はきけはあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、

大方おおかたないんでしょう」

「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立った。

二十二

父の病気は思ったほど悪くはなかつ

た。それでも着いた時は、床の上に
胡坐あぐらをかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じっとしている。

なにもう起きても好いいのさ」といった。
しかしその翌日よくじつからは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてし

まった。母は不承無性ふしょうおしょうに太織ふとりの蒲団ふとんを畳みながら「お父さんはお前が帰つて来たので、急に気が強くおなりなんだよ」といった。私わたくしには父の挙動がさして虚勢を張っているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の事がある場合でなければ、容易に父母の顔おちやはを見る自由の利きかない男であつた。妹は他国へ嫁よめいだ。これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかつ

た。兄妹きょうだい三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしている私だけであった。その私が母のいい付け通り学校の課業を放ほうり出して、休み前に帰って来たという事が、父には大きな満足であった。

「これしきの病気に学校を休ませては
気の毒だ。お母さんがあまり仰山ぎょうさんな手
紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういった。こういった
ばかりでなく、今まで敷とこいていた床を
上げさせて、いつものような元気を示

した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回^{ふりかえ}す
といけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにし
か
し極めて軽^{きよ}く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように

要心ようじんさえしていれば」

実際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈めまいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのです、

私たちは格別それを気に留めなかった。

私は先生に手紙を書いて恩借おんしゃくの礼を

述べた。正月上京する時に持参するか
らそれまで待つてくれるようにと断わ
った。そうして父の病状の思ったほど

険悪でない事、この分なら当分安心な
事、眩暈も嘔気も皆無な事などを書き
連ねた。最後に先生の風邪についても
一言の見舞を付け加えた。私は先生の
風邪を実際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生

の返事を予期していなかった。出した
後で父や母と先生の噂うわさなどをしながら、
遥はるかに先生の書斎を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸しいたけでも
持って行ってお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸なぞ

を食うかしら」

「旨^{うま}くはないが、別に嫌^{きら}いな人もない
だろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考
えるのが変であつた。

先生の返事が来た時、私はちよつと

驚かされた。ことにその内容が特別の
用件を含んでいなかった時、驚かされ
た。先生はただ親切づくで、返事を書
いてくれたんだと私は思った。そう思
うと、その簡単な一本の手紙が私には
大層な喜びになった。もっともこれは

私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というと私と先生の間に書信の往復がたびたびあったように思われるが、事実は決してそうでない事をちょっと断わっておきたい。私は先生の生

前にたった二通の手紙しか貰^{もら}っていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛^{あて}で書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければならないので、床を上げてか

らも、ほとんど戸外へは出なかった。

一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ

下りた事があるが、その時は万一を

気遣^{きづか}つて、私が引き添^{そは}うように傍^{そば}に付

いていた。私が心配して自分の肩へ手

を掛けさせようとしても、父は笑って

応じなかった。

二十三

わたくし

私は退屈な父の相手としてよく

しょうぎばん

将碁盤に向かった。二人とも無精な

たち

性質なので、炬燵にあたったまま、盤

やぐら

を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、

わざわざ手を掛蒲団かけふとんの下から出すような事をした。時々持駒もちごまを失なくして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付みけ出して、火箸ひばしで挟はさみ上げるという滑稽こっけいもあった。

「碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好いね、こうして楽に差せるから。無精者には持つて来いだ。もう一番やろう」

父は勝った時は必ずもう一番やろう

といった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる男であつた。始めのうちには珍しいので、この隠居いんきょじみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し

時日^たが経^つに伴^っれて、若い私の気力は
そのくらないな刺戟^{しげき}で満足できなくなっ
た。私は金^{きん}や香車^{きやうしや}を握^こった拳^{こぶし}を頭の上
へ伸ばして、時々思い切ったあくびを
した。

私は東京の事を考えた。そうして漲^{みなぎ}

る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ち
つづける鼓動^{こどう}を聞いた。不思議にもそ
の鼓動の音が、ある微妙な意識状態か
ら、先生の力で強められているように
感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較

して見た。両方とも世間から見れば、
生きているか死んでいるか分らないほ
ど大人おとなしい男であつた。他に認められ
るという点からいえばどっちも零れいであ
つた。それでいて、この将暮を差した
がる父は、単なる娯楽の相手としても

私には物足りなかった。かつて遊興のために往来ゆききをした覚えおぼのない先生は、歡樂の交際から出る親しみ以上に、いっつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭ひやというのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなか

に先生の力が喰い込んでいるといつても、血のなかに先生の命が流れているといつても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明

白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これは夏休み

などに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや^{もてな}歓迎されるのに、その峠を^{ていきどお}定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても

無くつても構わないもののように粗末
に取り扱われがちになるものである。

私も滞在中にその峠を通り越した。そ

の上私は国へ帰るたびに、父にも母に

も解^{わか}らない変なところを東京から持つ

て帰った。昔でいうと、儒者^{じゆしゃ}の家へ

切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の
持つて帰るものは父とも母とも調和し
なかった。無論私はそれを隠していた。
けれども元々身に着いているものだから、
出すまいと思っても、いつかそれが父や母の
眼とに留とまった。私はつい面

白くなくなった。早く東京へ帰りたくな
った。

父の病気は幸い現状維持のままで、
少しも悪い方へ進む模様は見えなかつ
た。念のためにわざわざ遠くから相当
の医者を招いたりして、慎重に診察し

でもらってもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃない

か」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろ
う」と父がいった。

私は自分の極めた出立しゅったつの日を動かさ
なかった。

東京へ帰ってみると、松飾まつかざりはいつか
取り払われていた。町は寒い風の吹く
に任せて、どこを見てもこれというほ
どの正月めいた景気はなかった。

私は早速さつそく先生のうちへ金を返しに行
った。例の椎茸しいたけもついでに持って行っ

た。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといいましたとわざわざ断って奥さんの前へ置いた。

椎茸は新しい菓子折に入れてあった。

鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽い

のに驚かされたのか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々掛念の問いを繰り返してくれた中に、

先生はこんな事をいった。

「なるほど容体ようだいを聞くと、今が今どう
という事もないようですが、病気が病
気だからよほど気をつけないといけま
せん」

先生は腎臓じんぞうの病やまいについて私の知らない

い事を多く知っていた。

「自分で病氣に罹^かっていながら、気が付かないで平氣でいるのがあの病の特色です。私の知ったある士官^{しかん}は、とうとうそれでやられたが、全く嘘^{うそ}のようにな死に方をしたんですよ。何しろ傍^{そば}に

寝ていた細君さいくんが看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいといって、細君を起したぎり、翌あぐる朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思ってたんだっていうんだから」

今まで樂天的に傾いていた私は急に不安になった。

「私の父おやじもそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」

「医者は何というのです」

「医者は到底とても治らないというんです。

けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好いでしょう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かず^ずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の変化を凝^{じつ}と見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆^{もろ}いものですね。いつでもどんな事でどんな死にようをしないと

も限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出いでで
すか」

「いくら丈夫の私でも、満まんざら更さら考えない
事ありません」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解わからないが、自

殺する人はみんな不自然な暴力を使う
んでしよう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭かげですね」

「殺される方はちっとも考えていなかった。なるほどそういえばそうだ」

その日はそれで帰った。帰ってから
も父の病気はそれほど苦にならなかった。
先生のいった自然に死ぬとか、不
自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、そ
の場限りの浅い印象を与えただけで、
後は何らのこだわりを私の頭に残さな
あ

かった。私は今まで幾度か手を着けようとしては手を引つ込めた卒業論文を、いよいよ本式に書き始めなければなら
ないと思ひ出した。

二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、

ぜひともこの論文を成規通り四月いっ
ぱいに書き上げてしまわなければなら
なかつた。二、三、四と指を折つて余
る時日を勘定して見た時、私は少し自
分の度胸を疑つた。他のものはよほど
前から材料を蒐めたり、ノートを溜め

たりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けず^ずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあつた。私はその決心でやり出した。そうして忽ち動けなくなつた。今まで大きな問^{たちま}

題を空^{くう}に描^{えが}いて、骨組みだけはほぼで
き上っているくらいに考えていた私は、
頭を抑^{おさ}えて悩み始めた。私はそれから
論文の問題を小さくした。そうして練
り上げた思想を系統的に纏^{まと}める手数を
省くために、ただ書物の中にある材料

を並べて、それに相当な結論をちよつと付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしようといった。狼狽し

た気味の私は、早速^{さっそく}先生の所へ出掛けて、私の読まなければならない参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうと
いった。しかし先生はこの点について

毫も私を指導する任に当ろうとしなかつた。

「近頃はあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であつたが、

その後^ごどういう訳か、前ほどこの方面に興味が無くなったようだ、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思ひ出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味を

もち得ないんですか」

「なぜという訳ありませんが。……

つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないで恥のようにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい

無理にも本を読んでみようという元気が出なくなっただけでしょう。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味くみを帯びていなかっただけに、私にはそれほどの

手^て応^{おた}えもなかった。私は先生を老い込
んだとも思わない代りに、偉いとも感
心せず^ずに帰った。

それからの私はほとんど論文に崇^たら
れた精神病者のように眼を赤くして苦
しんだ。私は一年前^{ぜん}に卒業した友達に

ついで、色々様子を聞いてみたりした。
そのうちの一人は締切しめきりの日に車で事務
所へ馳かけつけて漸ようやく間に合わせたとい
った。他の一人は五時を十五分ほど後おく
らして持つて行ったため、危あやうく跳はね付
けられようとしたところを、主任教授

の好意でやっと受理してもらったとい
った。私は不安を感じると共に度胸を
据えた。毎日机の前で精根のつづく限
り働いた。でなければ、薄暗い書庫に
はいって、高い本棚のあちらこちらを
見廻した。私の眼は好事家が骨董でも

掘り出す時のように背表紙の金文字を
あさった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を
南へ更^かえて行^ひった。それが一仕切^{ひとしきり}経^たつ
と、桜の噂^{うわさ}がちらほら私の耳に聞こえ
出した。それでも私は馬車馬のように

正面ばかり見て、論文に鞭^{むち}うたれた。

私はついに四月の下旬が来て、やっと
予定通りのものを書き上げるまで、先
生の敷居を跨^{また}がなかった。

二十六

私^{わたくし}の自由になったのは、八重桜^{やえざくら}の散

った枝にいつしか青い葉が霞むように
　　伸び始める初夏の季節であった。私は
　　籠を抜け出した小鳥の心をもって、広
　　い天地を一目に見渡しながら、自由に
　　羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行
　　った。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、

萌^{もえ}るような芽を吹いていたり、柘榴^{ざくろ}の
枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の
葉が、柔らかそうに日光を映していた
りするのが、道々私の眼を引き付けた。
私は生れて初めてそんなものを見るよ
うな珍しさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、
「もう論文は片付いたんですか、結構
ですね」といった。私は「お蔭かげでよう
やく済みました。もう何にもする事は
ありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべき

すべての仕事がすでに結了けつりょうして、これから先は威張い張がって遊あそんでいても構かまわな
いような晴はやかな心持こころもちでいた。私は書
き上げた自分の論文ろんぶんに対して充分じゅうぶんの自
信じしんと満足まんぞくをもっていた。私は先生せんせいの前
で、しきりにその内容を喋ちやうちやう々ちやうちやうした。先

生はいつもの調子で、「なるほど」と
か、「そうですか」とかいつてくれた
が、それ以上の批評は少しも加えな
った。私は物足りないというよりも、
聊か拍子抜けの気味であつた。それで
もその日私の気力は、因循らしく見え

る先生の態度に逆襲を試みるほどに
生々いきいきしていた。私は青く蘇生よみがえろうとす
る大きな自然の中に、先生を誘い出そ
うとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ
出ると大変たいへん好い心持です」

「どこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴^っれて郊外へ出たかった。

一時間の後^{のち}、先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所^{あて}を宛もなく歩いた。私は

かなめの垣から若い柔らかい葉をぎ取
って芝笛しばふえを鳴らした。ある鹿児島人かごしまじんを
友達にもって、その人の真似まねをしつつ
自然に習い覚えた私は、この芝笛とい
うものを鳴らす事が上手であった。私
が得意にそれを吹きつづけると、先生

は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖とざされたように蒨こんもり鬱

した小高い一構ひとかまえの下に細い路みちが開ひらけ

た。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事

がすぐ知れた。先生はだらだら上^{のぼ}りに
なっている入口を眺^{なが}めて、「はいって
みようか」といった。私はすぐ「植木
屋ですね」と答えた。

植込^{うえこみ}の中をうねりして奥^{ひと}へ上^{のぼ}ると
左側に家^{うち}があった。明け放った障子^{しょうじ}の

内はがらんとして人の影も見えなかった。ただ軒先のきりぎりすに据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつでも構わないだろうか」

「構わないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、「これは霧島でしょう」といった。

芍薬も十坪あまり一面に植え付けら

れていたが、まだ季節が来ないので花
を着けているのは一本もなかった。こ
の芍薬畠ばたけの傍そばにある古びた縁台のよう
なものの上に先生は大の字なりに寝た。
私はその余った端はじの方に腰をおろして
烟草タバコを吹かした。先生は蒼い透すき徹とおる

ような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗の頂に投げ被せてあった先生の帽

子が風に吹かれて落ちた。

二十七

わたくし私はすぐその帽子を取り上げた。

ところどころ所々に着いている赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

身体からだを半分起してそれを受け取った

先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家うちには財産がよつぽ

とあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地でんちが少しあるぎりで、金なんかまるでないんで

しょう」

先生が私の家の経済いえについて、問い
らしい問いを掛けたのはこれが始めて
であった。私の方はまだ先生の暮し向
きに関して、何も聞いた事がなかった。
先生と知り合いになった始め、私は先

生がどうして遊んでいられるかを疑った。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨あらわな問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませ

ていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもっていらっしゃるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なを

していた。それに家内かないは小人数こにんずであつた。したがって住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢ぜいたくといえないまでも、

あたじけなく切り詰めた無弾力性のも
のではなかった。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりゃそのくらいの金はあるさ、
けれども決して財産家じゃありませ
ん。財産家ならもっと大きな家でも造

るさ」

この時先生は起き上って、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようにものを描かき始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直まっすぐ

に立てた。

「それでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとごとのようであ

った。それですぐ後あとに尾ついて行き損な

った私は、つい黙っていた。

「それでも元は財産家なんですよ、

君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかった。むしろ不調法で答えられなかったのである。すると先生がまた問題を他へ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後ど

うなりました」

私は父の病氣について正月以後何も知らなかった。月々国から送ってくれる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟しゆせきであつたが、病氣の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつ

た。その上書体も確かであつた。この
種の病人に見る顫えが少しも筆の運び
を乱していなかった。

「何ともいつて来ませんが、もう好い
んでしょう」

「好ければ結構だが、——病症が病症

「なんだからね」

「やっぱり駄目ですかね。でも当分は
持ち合ってるんでしょう。何ともいつ
て来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いた

り、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだまをその通り口にする、普通の談話と思っ
て聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持たない私は

無論そこに気が付くはずがなかった。

二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらっておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者な

うちに、貰^{もら}うものはちゃんと貰^{もら}っておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

私は先生わたくしの言葉に大した注意を払わ

なかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実際的なに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対す

る平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣いをするのが気に触ったら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、

いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口氣こうきは珍しく苦々しかった。

「そんな事をちつとも氣に掛けちゃい
ません」と私は弁解した。

「君の兄弟きょうだいは何人でしたかね」と先生
が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数にんずを聞いた
たり、親類の有無を尋ねたり、叔父おじ
や叔母おばの様子を聞いた。そうして
最後にこういった。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもい

ないようです。大抵田舎者いなかものですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮ついきゆうに苦しんだ。しかし先

生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって

悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親戚しんせきなぞのうち中に、これといって、悪い人間はいないようだという一類しましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにに入れたよう

な悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができません」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何かいおうとした。すると後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付け

てある杉苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂つて生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被つたま

ま先生の前へ廻まわって礼をした。

「叔父さん、はいつて来る時、家うちに誰だれもいなかったかい」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおっかさんが勝手の方たのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日^{こんにち}はって、断つてはいつて来ると好^よかったのに」

先生は苦笑した。懷中^{ふところ}から褃口^{がまぐち}を出

して、五錢の白銅^{はくどう}を小供の手に握らせ
た。

「おつかさんにそういつとくれ。少し
ここで休まして下さいって」

小供は^{りこ}伶俐^{うなず}そうな眼に^{わら}笑いを^{みなぎ}漲^みらして、^{うなず}首肯^{せつこう}いて見せた。

「今^{せつこう}斥候^{ちやう}長^{よう}になるところなんだよ」

小供はこう断つて、躑躅つづじの間を下の方へ駈け下りて行つた。犬も尻尾しっぽを高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行つた方へ駈けていった。

私は妻を残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与え、事を好みません。私は妻に血の色を見せないので死ぬつもりです。妻の知らない間に、こっそりこの世からい

なくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓死とんししたと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあ

なたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然はつきり描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。

私は酔興すいきように書くものではありません。私

を生んだ私の過去は、人間の経験の一

部分として、私より外ほかに誰も語り得る

ものはないのですから、それを偽りいつわな

く書き残して置く私の努力は、人間を

知る上において、あなたにとつても、

外の人にとつても、徒勞ではなからう
と思います。渡辺華山は邯鄲という画
を描くために、死期を一週間繰り延べ
たという話をつい先達せんだつて聞きました。
他ひとから見たら余計な事のようにも解釈
できかもしれませんが、当人にはまた当人相

応の要求が心の中^{うち}にあるのだからやむをえないともいわれるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば^{なか}以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。

この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。

とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行き

ました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考

に供するつもりです。しかし妻だけは
たった一人の例外だと承知して下さい。
私は妻には何にも知らせたくないの
です。妻が己^{おの}れの過去に対してもつ記憶
を、なるべく純白に保存しておいてや
りたいのが私の唯一^{ゆいいち}の希望なのですか

ら、私が死んだ後^{あと}でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」

一刷

1991（平成3）年2月25日第

一〇刷

1995（平成7）年6月14日第

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8

月二日

※誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5686）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyaana

校正：伊藤時也

1999 年 7 月 31 日公開

2010 年 10 月 31 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インター

ネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られ
ました。入力、校正、制作にあたった
のは、ボランティアの皆さんです。

このファイルはW3C勧告
XHTML.1にそった形式で作成
されています。「#⋮」は、入力者
による注を表す記号です。「くの字
点」をのぞくJIS X 0213にある文字
は、画像化して埋め込みました。

